

《偕行》26年11月号

ちよつと良い話

堀江大先輩 安倍総理と語る

編集委員長

戸塚 新

10月2日に開催された世田谷偕行会

たいと参列した。

で、大正4年お生まれの堀江正夫大先輩50期が、司会者の求めに応じて、「私は来賓ではなく、この会の会員だから挨拶はおかしいと思うが、ご指名なので最近の経験を」と次のお話をされた。マスコミの伝えない佳話なので、メモ書きにより文責戸塚でご披露する。

なお、堀江大先輩は終戦時には東部ニューギニアの第18軍参謀。戦後自衛隊に奉職されて西部方面総監まで勤められ、退官後、参議院議員になられた。現在「日本郷友連盟」と「英霊にこたえる会」の名譽会長である。

以下、一人称は堀江氏。

安倍総理夫妻が、1885年の中曾根総理以来29年ぶりにパプア・ニューギニアを訪問され、7月12日に、日本政府がウエワクに建てた戦没者慰霊碑に参拝された。戦後、日本の総理が、外地に建てた慰霊碑に正式に参拝されたのは、これが初めてである。私は18軍の生き残りとして、13万の御英霊に代わり、現地で総理にお礼を申し上げ

たいと参列した。パプア・ニューギニアの東セビック州知事(前首相)ソマーレ氏は、前の戦争中、同地に戦った柴田中尉に可愛がられ、読み書きを教わった子どもで、未だにそのことを深く感謝し、懐かしむ親日家である。彼の指導もあつてのこととは思いますが、安倍総理到着の際は学校が臨時休校、空港から市内まで相

当の道のりを両側に切れ目なく人の波で埋まり、見ても決して政府の強制によるものではなく、まさに住民挙げての歓呼歓迎であつた。

後刻安倍総理は、「何処の国を訪問しても、いや、郷里山口県においてさえ、こんな盛大な歓迎は受けたことがない」と言われた。内外で前の戦争は日本の侵略であり、未だに現地は怨恨に満ちていると説く「識者」たちは、この現実をどう見るのであろうか。

同地におけるソマーレ知事の総理歓迎昼食会に、私は遺族代表とともに同席させて貰えたが、その後別室で総理ご夫妻と20分間、遺族会会長と一緒に懇談の機会を頂いた。席上、どうやら

終始私一人が喋っていたようで反省しているが、東部ニューギニアでの惨烈な戦いの現実と将兵の健闘、厳しい戦況の中で原住民が積極的に協力してくれ、戦後も良い関係を維持して来た実態、御遺骨収集の現状等々についてお話しした。特に昭恵夫人が時折り涙を拭いながら聞き入って下さったのには感激した。

帰国時にも特別にご配慮を頂き、総理の政府専用機に同乗を許され、更に機中の総理ご夫妻の食事に陪席させて貰えた。これは私一人の榮譽ではない。死んだ戦友たちに替わって総理からの殊遇を頂いているものだと思います。甘えさせて頂いた。

機中でお話ししたことはいろいろあるが、特に今年の叙勲で、元統幕議長の竹河内捷次元空将が、瑞宝大綬章を、つまり勲一等を頂戴した。これは全く初めてのことで、従来は統幕議長も3人の幕僚長も、瑞宝重光章、勲二等止まりであつた。総理の格別なご指導に深く御礼申し上げ、更に何時のころか、文官だけが格上げを行い、制服が取り残され相当の文官に比べてずっと格下に位置付けられるようになってくる現状を申し上げ、自衛官は榮譽を求めて任務に尽瘁しているわけではなけれども、国が正当に評価してくれているという思いを持れば志気は自

ずから振うであろう。更にご配慮を賜りたいと申しておいた。

今日はこの後で、田母神俊雄さんのご講演があるので、この辺にしておく。

